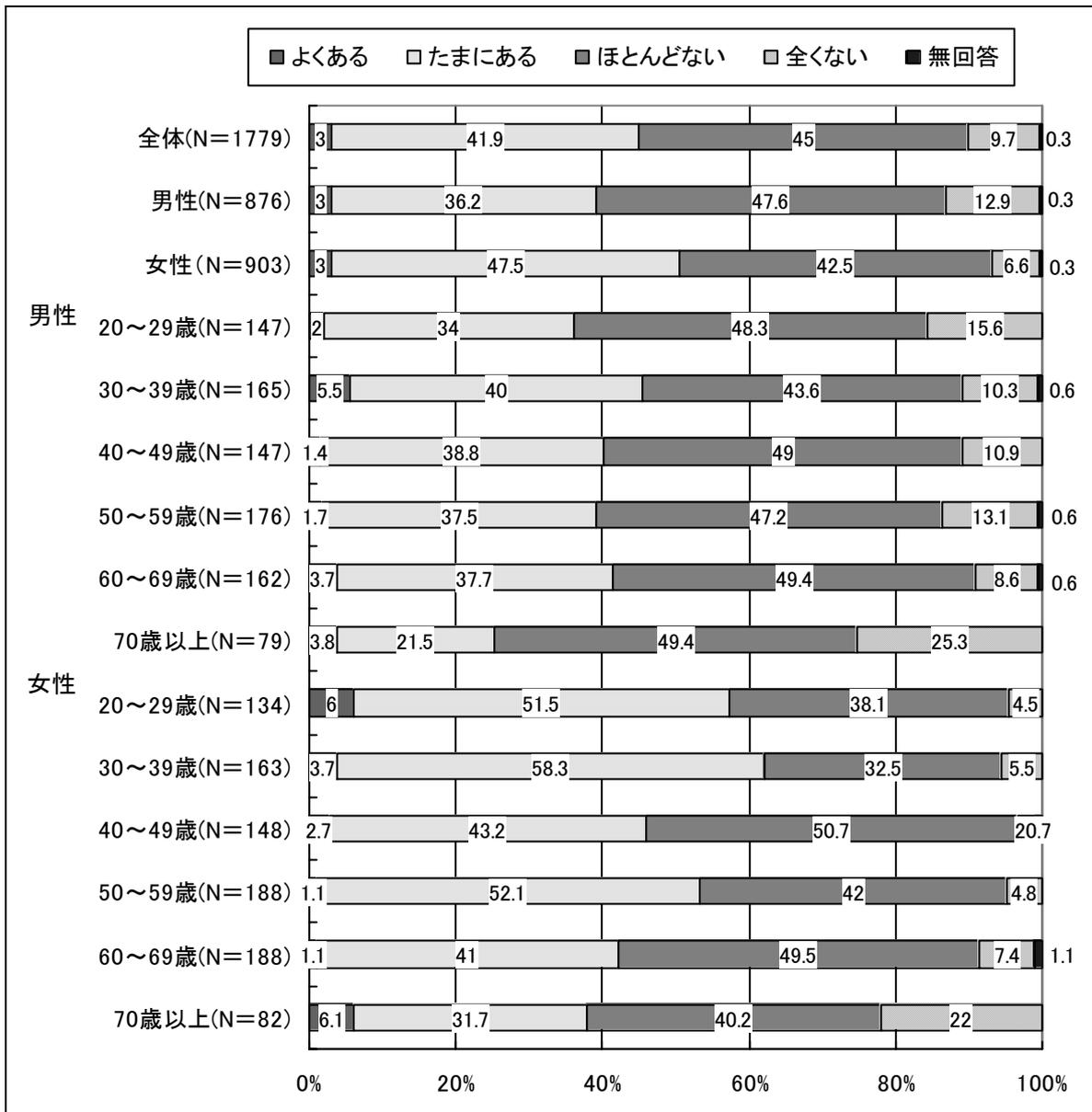


第2章 犯罪被害に対する不安感

1. 日常感じている不安感

本調査の問3では、「あなたは、日頃、ご自身が犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じることはありますか」と尋ね、自分自身が犯罪にあう不安を、「よくある」「たまにある」「ほとんどない」「全くない」の4件法で回答を求めた。結果は、図Ⅱ-2-1と図Ⅱ-2-2のとおりである。

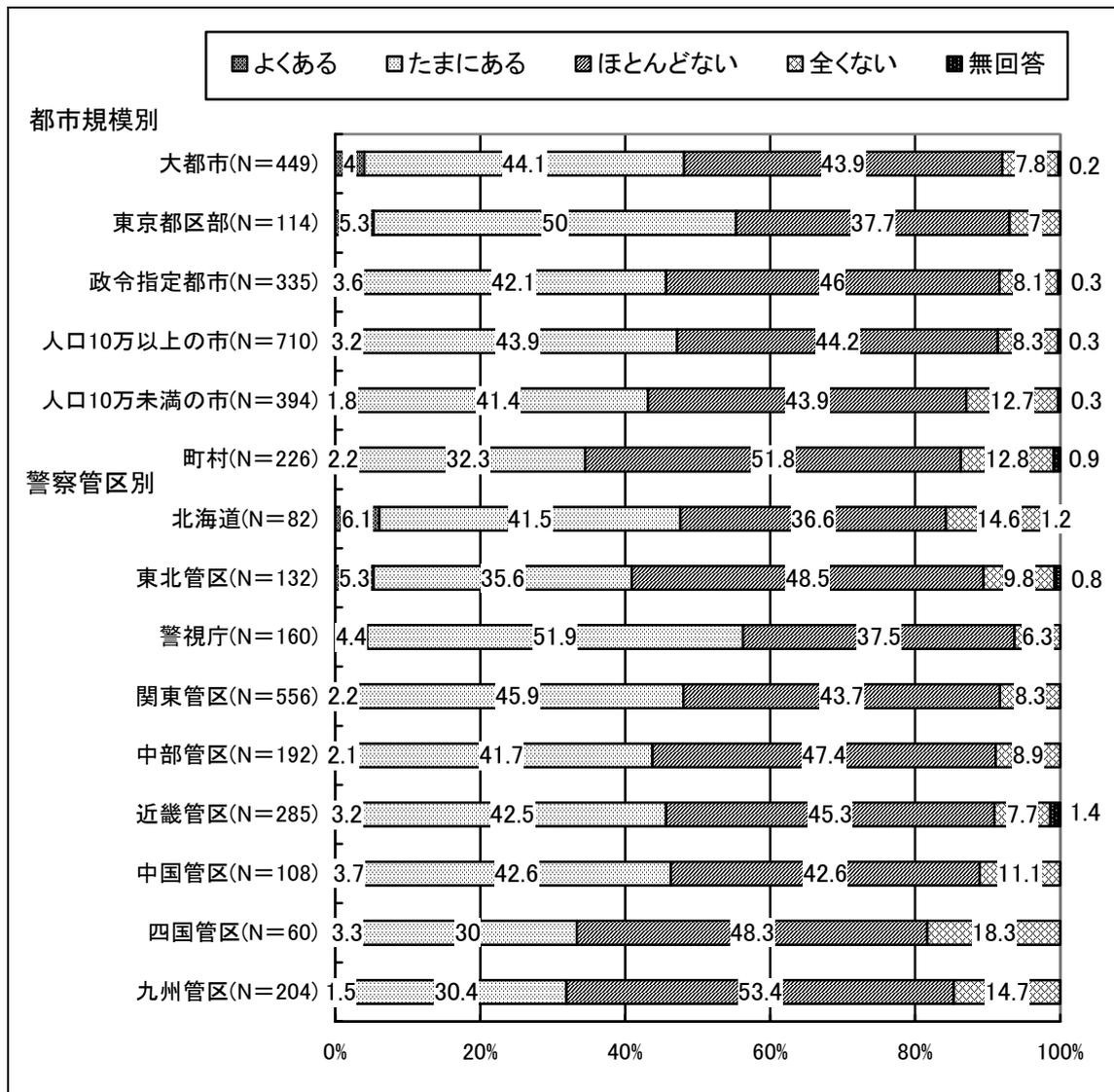
図Ⅱ-2-1 犯罪被害に対する不安感(男女別、年齢別)



不安を感じる事が「よくある」と「たまにある」を合計すると、全体では44.9%、男性は39.2%、女性は50.5%になる。逆に「全くない」は、全体では9.7%、男性12.9%、女性6.6%にとどまる。男性よりも女性のほうが、多少なりとも犯罪被害と無縁でないと感じている割合が高い。「よくある」と「たまにある」の合計回答率を前回の調査（2004年10月実施）と比較すると、全体では53.3%から44.9%に、男性は50.4%から39.2%に、女性では56.0%から50.5%に減少しており、不安感の緩和傾向がうかがえる。

性・年齢別では、「よくある」と「たまにある」の合計回答率は、男女とも70歳以上が最も低く、男性が25.3%、女性が37.8%であった。その他の年代については、男性では、30歳代でやや高く（45.5%）、20歳代でやや低い（36.0%）。女性では、30歳代が最も不安感が高く（62.0%）、次いで20歳代（56.5%）、50歳代（53.1%）の順であった。

図Ⅱ-2-2 犯罪被害に対する不安感(都市規模別、警察管区別)

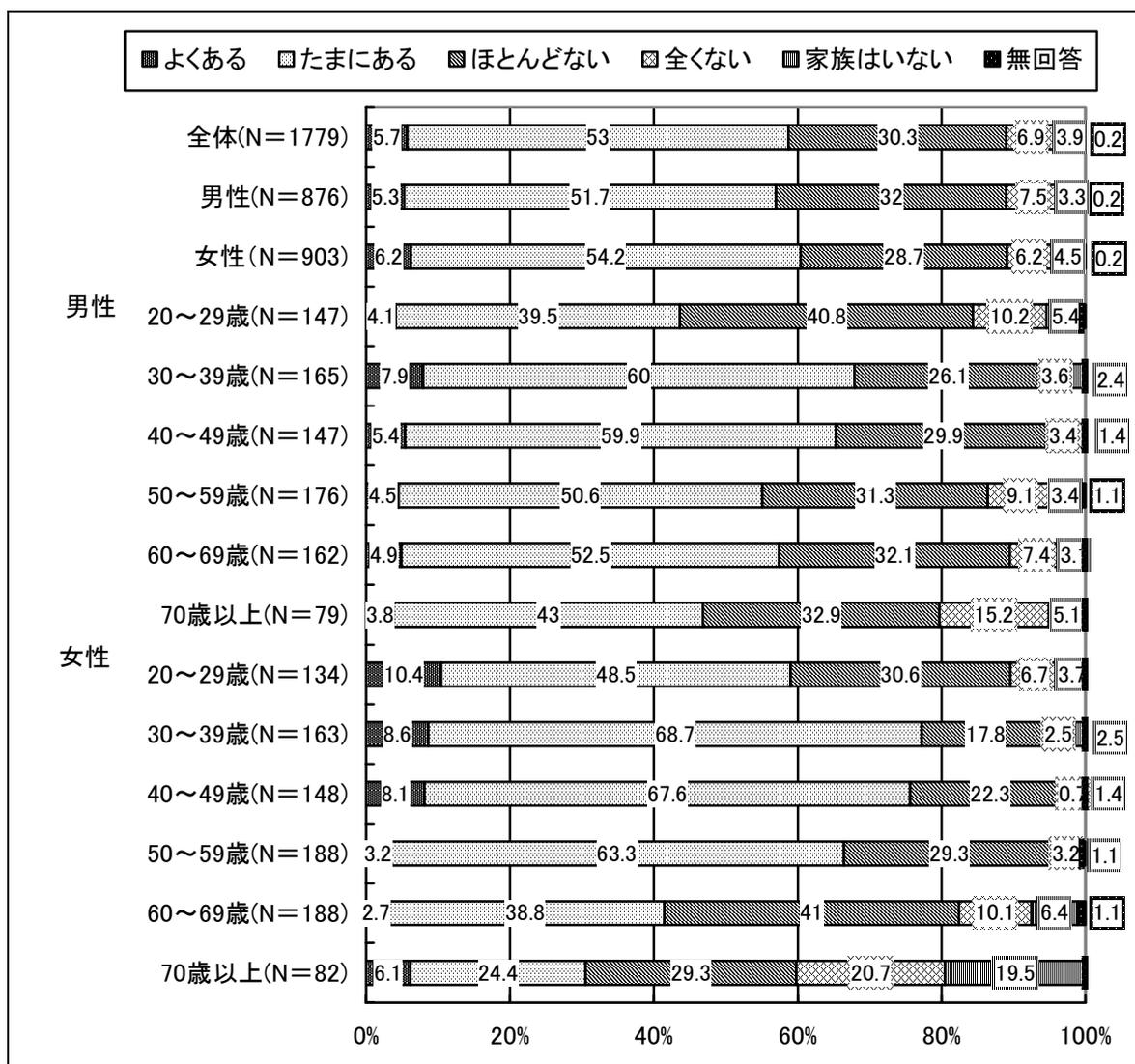


都市規模別の「よくある」と「たまにある」の合計回答率は、東京都区部（55.3%）で最も高く、町村（34.5%）で最も低く、人口10万未満の市（43.2%）でやや低い。警察管区別では比較的大きな違いが見られ、「よくある」と「たまにある」の合計が5割を越えたのが警視庁（56.3%）、5割近いのが関東管区（48.1%）と北海道（47.6%）、4割5分前後が中国管区（46.3%）、近畿管区（45.7%）、中部管区（43.8%）で、九州管区（31.9%）と四国管区（33.3%）は3割台であった。

2. 家族が被害にあう不安感

問4「あなたの同居の家族が、犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じるがありますか」と尋ねた。結果は次の図Ⅱ-2-3と図Ⅱ-2-4に示した。

図Ⅱ-2-3 同居の家族が被害にあう不安(男女別、年齢別)

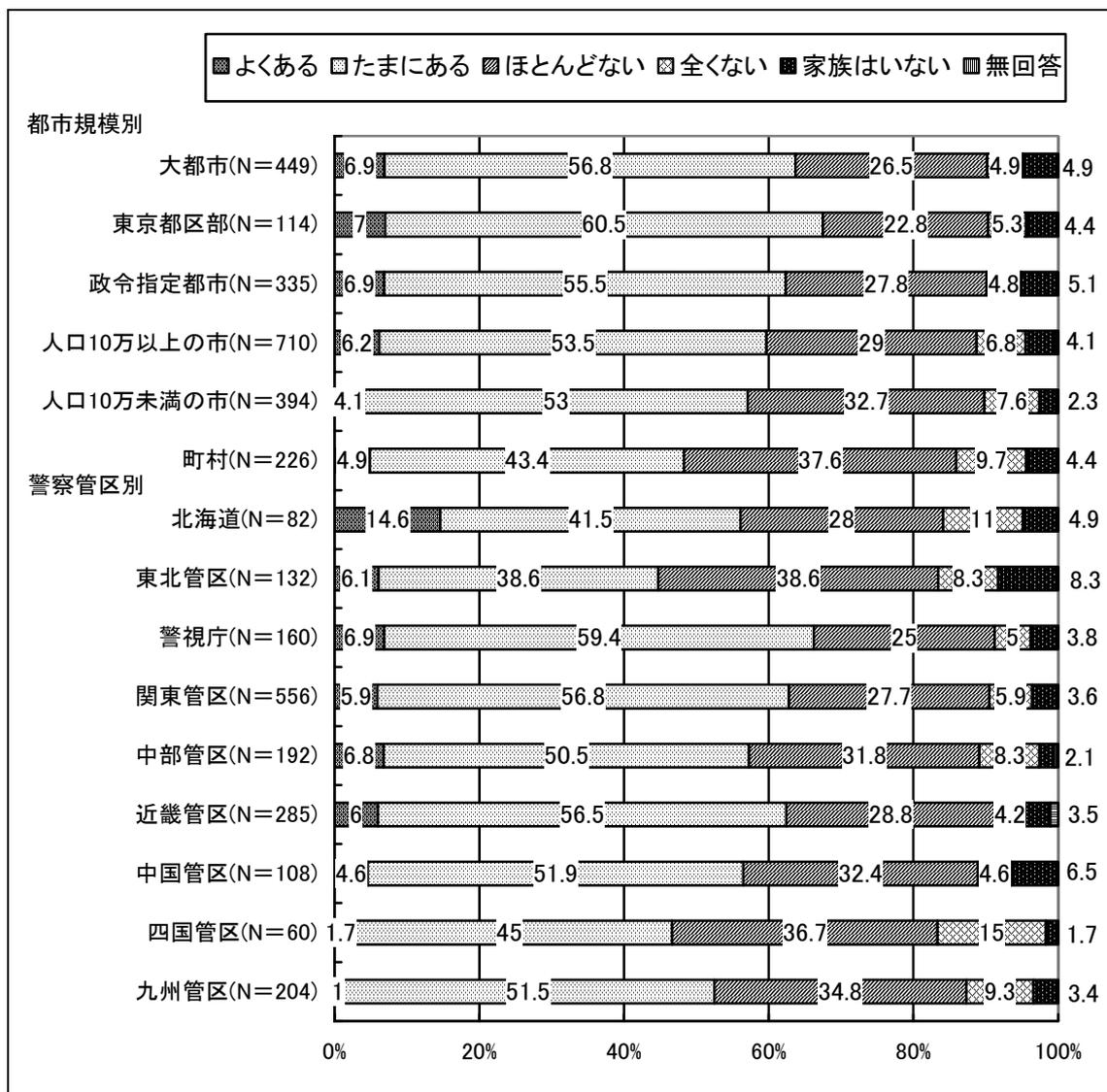


同居の家族が犯罪の被害にあう不安を感じるものが「よくある」と「たまにある」を合計すると、全体では58.7%、男性は57.0%、女性は60.4%で、女性のほうがやや高い。

この比率は、自分自身が犯罪の被害にあうのではないかと不安感に比べ、全体で13.8%、男性は17.8%、女性は9.9%高くなっている。

性・年齢別では、男女ともに30歳代の不安感が最も高く、男性は20歳代が、女性は70歳以上の不安感が最も低い。男女ともに30歳代をピークに山形の分布になっている。

図Ⅱ-2-4 同居の家族が被害にあう不安(都市規模別、警察官区別)



同居の家族が犯罪の被害にあう不安を感じるものが「よくある」と「たまにある」の合計は、都市規模別にみると、大都市ほど不安感が高い。東京都区部(67.5%)が最も高く、以下、政令指定都市(62.4%)、人口10万以上の市(59.7%)、人口10万未満の市(57.1%)、

町村（48.3%）の順に低くなる。警察管区別では、6割を超えるのは、警視庁（66.3%）、関東管区（62.7%）、近畿管区（62.5%）の3管区であった。

3. 自身および家族の犯罪被害に対する不安感—罪種別

問5「あなたは、日頃、あなた自身や同居の家族が犯罪の被害にあうのではないかと、いう不安をどの程度感じていますか」と尋ね、a)～u)のそれぞれの犯罪ごとに回答を求めた。回答は、「非常に不安」「かなり不安」「やや不安」「不安はない」の4件法でえた。結果は、**図Ⅱ-2-5**に示した。

「非常に不安」「かなり不安」「やや不安」の回答合計が高い順に、「飲酒運転による交通事故、ひき逃げなどの悪質・危険な交通法令違反の被害にあう」（78.1%）、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」（77.7%）、「自宅や敷地内に無断で侵入される」（62.3%）、「暴行や傷害などの暴力的な犯罪にあう」（61.8%）、「ひったくりにあう」（61.3%）となっている。また、「非常に不安」と「かなり不安」の回答合計は、「子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」（26.1%）、「子どもが連れ去られる」（21.4%）、「子どもが性的な被害にあう」（19.3%）の比率が高く、人々が子どもが被害にあう不安感を強く抱いていることがうかがえる。

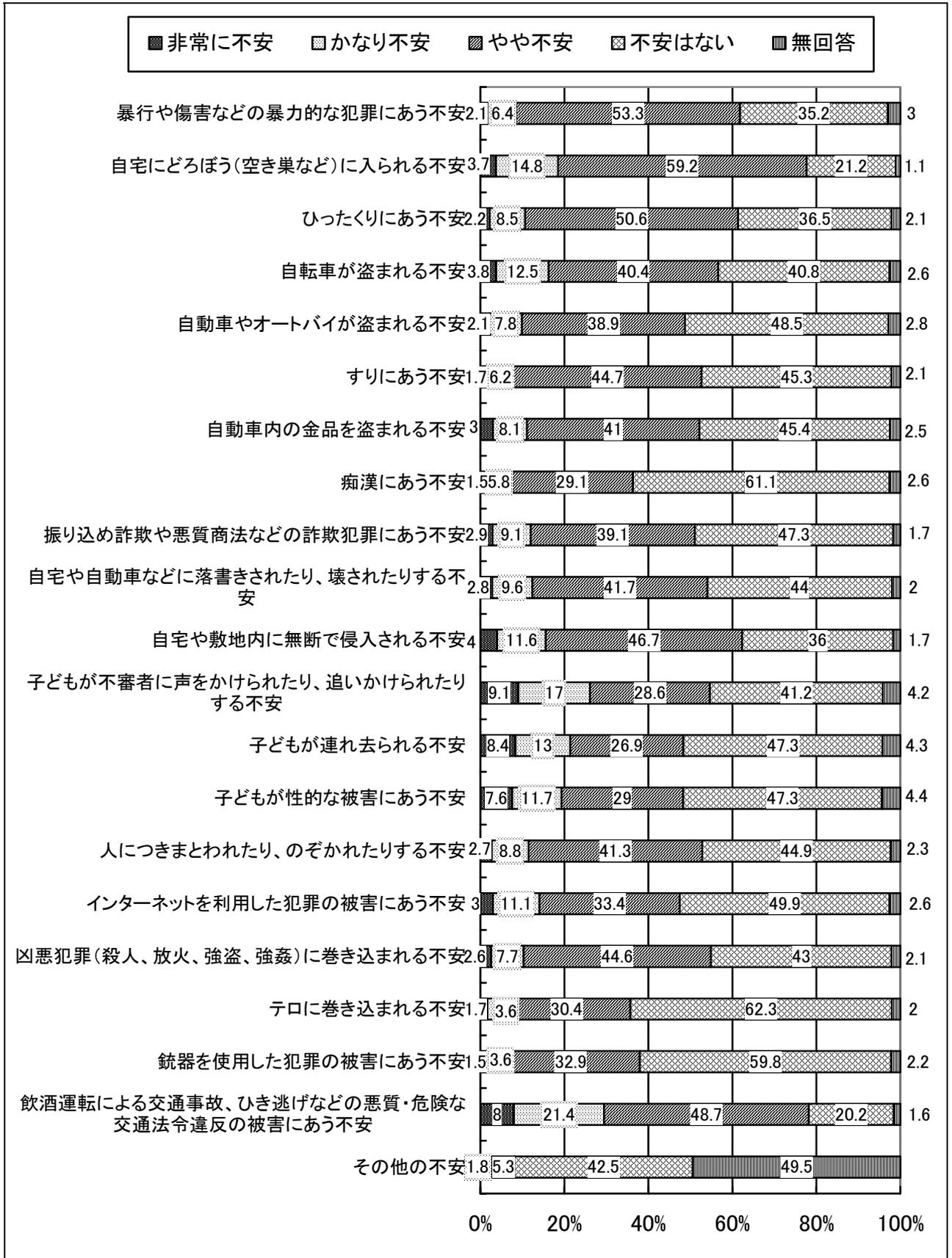
一方、「テロに巻き込まれる」（35.7%）、「痴漢にあう」（36.4%）、銃器を使用した犯罪の被害にあう」（38.0%）等は、全体としては不安感を持つ者の割合が低くなっている。

4. 自身および家族が犯罪被害にあう可能性の認識(リスク知覚)—罪種別

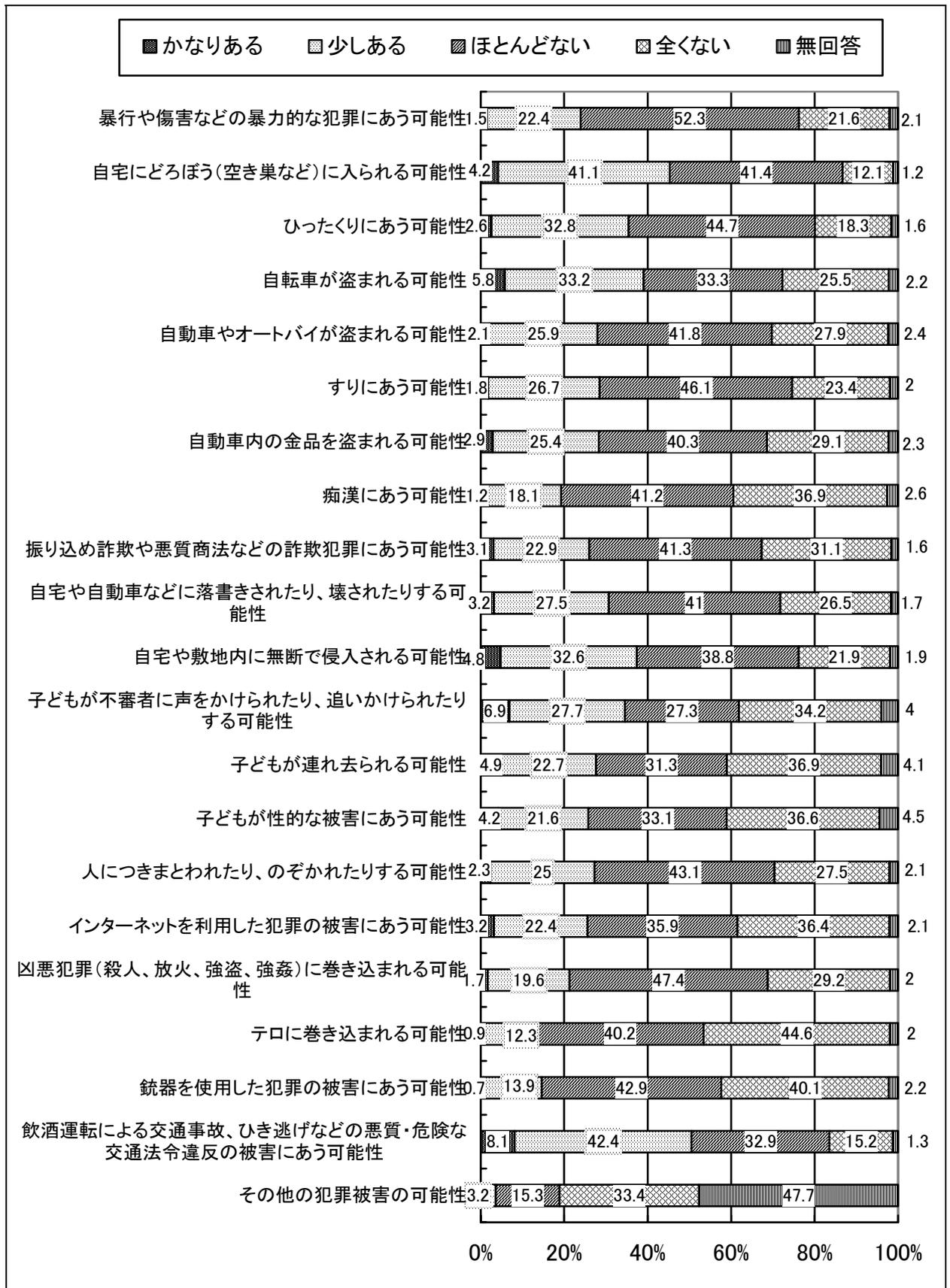
問6「あなた自身や同居の家族が今後1年間に、犯罪の被害にあう可能性がどの程度あると思っていますか」と尋ね、前問と同じ犯罪を並べて、犯罪の被害にあう可能性に関する回答を求めた。回答の選択肢は、「かなりある」「少しある」「ほとんどない」「全くない」の4件法である。結果は、**図Ⅱ-2-6**に示した。

被害可能性が「かなりある」と「少しある」の合計値が高い順に、「悪質・危険な交通法令違反の被害にあう」（50.5%）、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」（45.3%）、「自転車が盗まれる」（39.0%）、「自宅や敷地内に無断で侵入される」（37.4%）、「ひったくりにあう」（35.4%）、「子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」（34.6%）、「自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりする」（30.7%）などが上げられ、これらの罪種は前問の不安感の高い罪種と若干順位が異なる。

図Ⅱ-2-5 各種犯罪に対する不安の程度



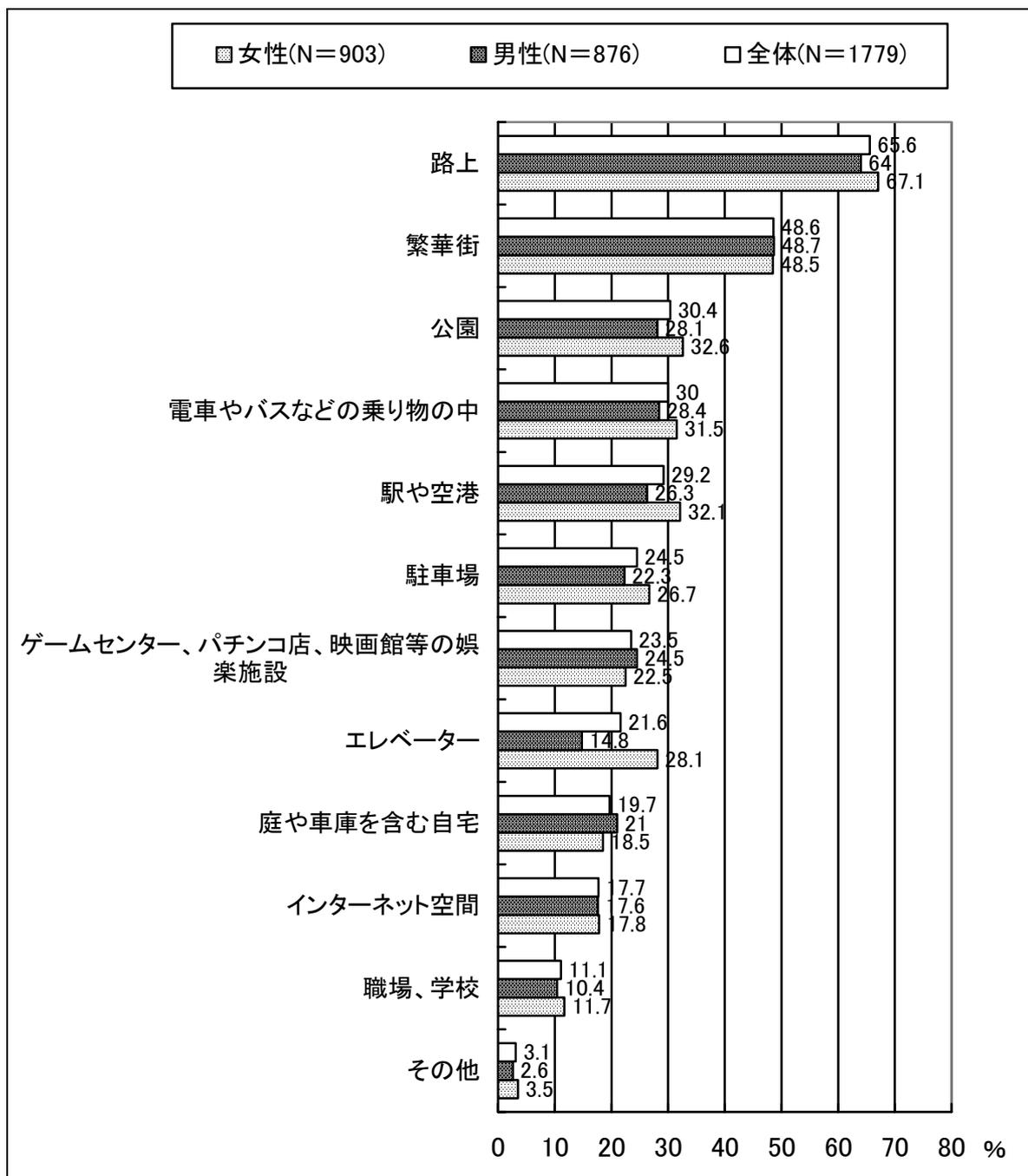
図Ⅱ-2-6 各種犯罪被害にあう可能性の判断(リスク知覚)



5. 犯罪被害への不安感が生じる場所

問7「あなたは日常の行動範囲にあるどのような場所で、あなた自身や同居の家族が犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じることはありませんか」と尋ね、不安を感じる場所すべてに○をつけてもらった。結果は、図Ⅱ-2-7のとおりである。

図Ⅱ-2-7 犯罪被害への不安が生じる場所



全体としてみると、不安の高い場所は、「路上」(65.6%)、「繁華街」(48.6%)、「公園」(30.4%)、「電車やバスなどの乗り物の中」(30.0%)、「駅や空港」(29.2%)の順であった。当然ながら、出入りが特定の人に限定される「職場、学校」は少なく(11.1%)、利用者がまだ限定されている「インターネット空間」も少ない(17.7%)。男女間では総じて女性のほうが、どの場所に対しても不安が高いが、特に、エレベーターと駅や空港での不安感が高い。

都市規模別では、総じて大都市ほどさまざまな場所に対する不安感が高く、小都市・町村になるほど低くなるが、この傾向が顕著なのは、駅や空港、繁華街、乗り物の中、エレベーター等である。ただし、駐車場での不安感は大都市で低く、町村が最も高い。警察管区別に検討すると、都市規模別と同様に、概して大都市で不安感が高い傾向があるが、各場所によって多少の違いがみられる。公園に対する不安感には北海道が、庭や車庫を含む自宅は東北管区が、駐車場は四国管区が最も高い。また、職場・学校、庭や車庫を含む自宅、インターネット空間、路上、ゲームセンター・パチンコ店・映画館等の娯楽施設に対する不安感には、警察管区間の違いが小さい。

6. 夜間、地域内一人歩きに対する不安感

日常生活において、犯罪被害に対する不安をもっとも身近に感じる場面は、住んでいる地域内を夜間に一人で歩いている場合であろう。この行動に関し、住民の大多数が不安を感じない地域が多い社会であれば、社会全体に対する体感的治安に信頼がある社会であり、ひと頃のがが国がまさに、その様な治安の良い社会であった。実際に我々は日本中どこに出向いても、どの地域でも住民が夜間、不安を感じることなく一人で歩いているのを見ており、日本人のほとんどが、わが国・社会の治安に不安を感じる事がなかった。

この様な観点から、国際的に体感治安の良否を測る指標として、この設問がなされた調査例があり、本調査でも援用した。

問8「あなたは夜11時を過ぎてから、住んでいる地域を1人で歩いているとき、犯罪にあらう不安をどの程度感じていますか」と尋ねた。回答は、「非常に不安を感じる」「ある程度不安を感じる」「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」の4つに、「出歩かないから分からない」を加えて5つの選択肢を提示した。

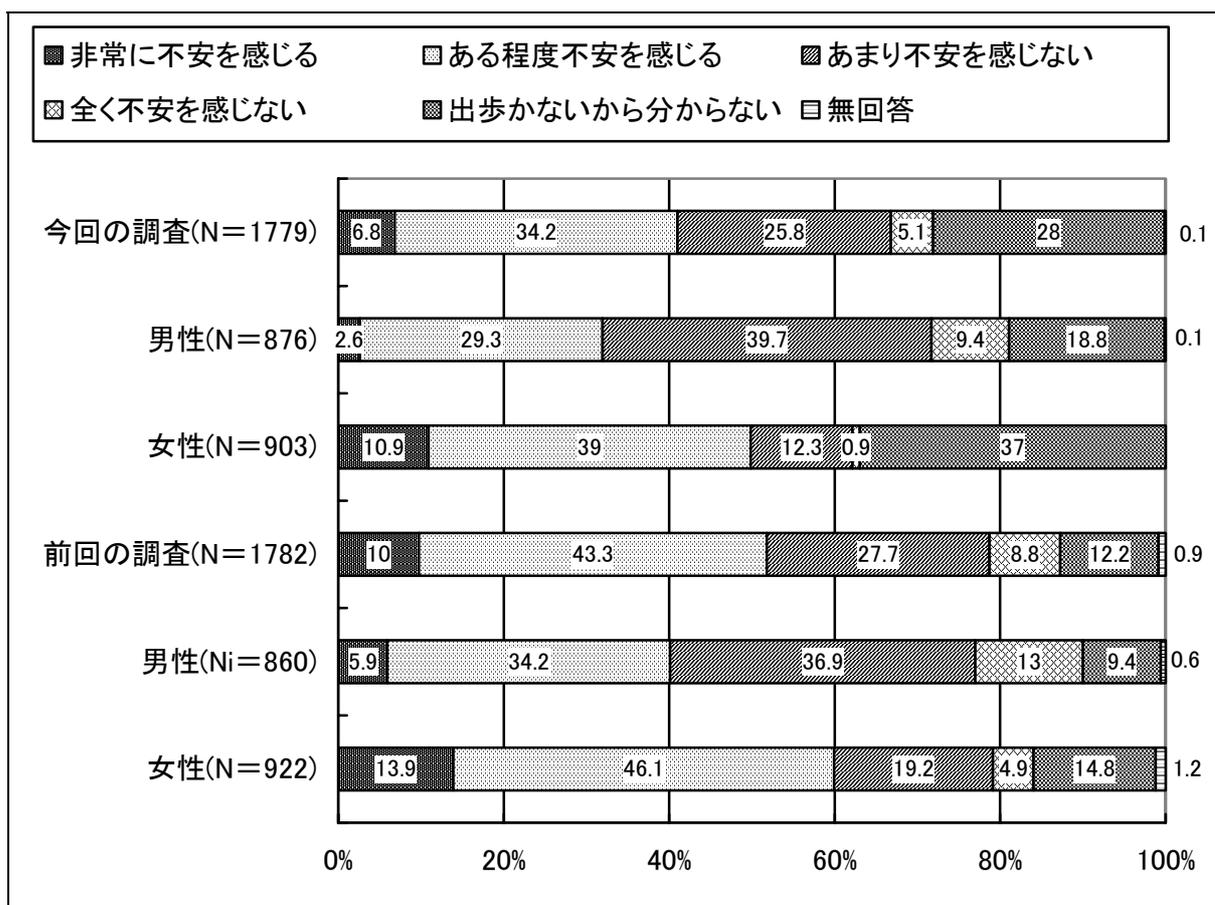
まず、今回の調査(2007年10月実施)と2004年10月に実施した前回の調査の比較を行い、最近のがが国の体感治安の変化をみていく。

図Ⅱ-2-8に示すように、今回の調査結果を全体的にみると、「不安を感じる」と回答した人(「非常に不安を感じる」+「ある程度不安を感じる」)の割合が41.0%、「不安を感じない」と回答した人(「あまり不安を感じない」+「全く不安を感じない」)の割合が30.9%であり、不安を持つ人の方がかなり多い。また、男女別では大きな違いがあり、男

性では「不安を感じる」と回答した人が31.9%、逆に「不安を感じない」と回答した人が49.1%であるのに対し、女性は「不安を感じる」が49.9%、「不安を感じない」が13.2%である。女性の半数は、居住地域内においても夜間の一人歩きに安心していない状況にある。

今回の調査を前回の調査と比べると、「不安を感じる」と回答した人の割合がかなり減少し（前回の調査：53.3%→今回の調査：41.0%）、体感治安はかなり改善している。ところが、「不安を感じない」と回答した人の割合もやや減少している（前回の調査：36.5%→今回の調査：30.9%）。今回の調査では、「出歩かないから分からない」という回答が前回よりも大幅に増加していることから、このことが「不安を感じる」と「不安を感じない」と回答した人の割合に影響していると考えられる。「出歩かないから分からない」という回答者の割合を男女別に前回の調査と比較すると、今回の調査では男性で2倍に、女性で2.5倍に増えている。

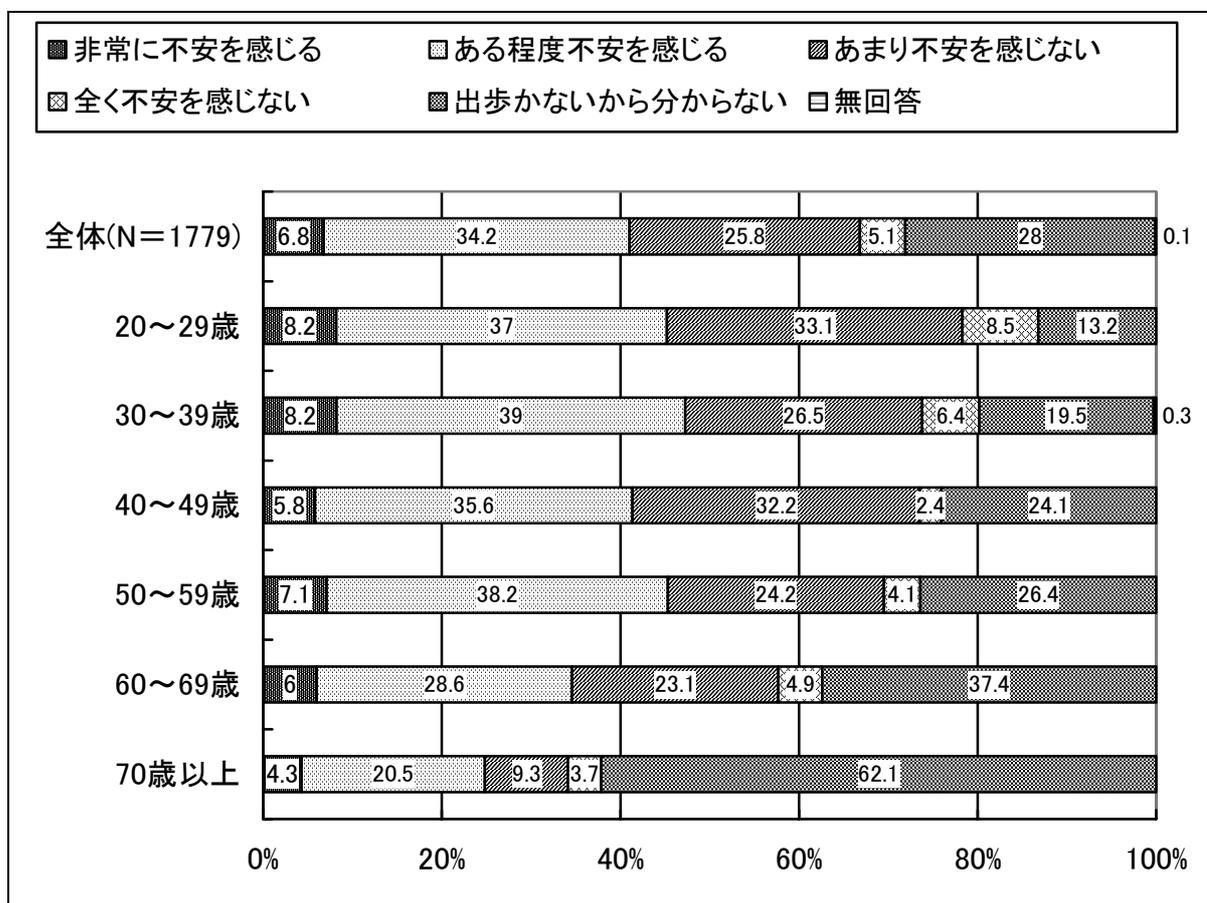
図Ⅱ-2-8 夜間、一人歩きに対する不安感の変化(前回の調査との比較、男女別)



夜間の一人歩きに対する不安感を年代別にみると、図Ⅱ-2-9に見るように、年代が高いほど「不安を感じる」「不安を感じない」人の割合が低くなり、「出歩かないから分から

ない」人の割合が高くなる。60歳代では37.4%が、70歳以上になると62.1%の人が夜間に出歩かないと回答している。

図Ⅱ-2-9 夜間、一人歩きに対する不安感(年齢別)



都市規模別では、「不安を感じる」が、大都市45.6%、人口10万以上の市41.8%、人口10万未満の市37.1%、町村36.2%である。これに対して、「不安を感じない」と回答した人はどの都市でもほとんど差がない。また、「出歩かないから分からない」と回答した人は、大都市ほどその割合が少ない。都市規模が大きいほど夜間の一人歩きに不安を持つ人が多い傾向があるが、その傾向はごく弱く、どの都市でも一様にこの種の不安が高いといえよう。

警察官区別では大きな違いがあり、「不安を感じる」と回答した人の割合は近畿管区が最も高く(48.8%)、次いで高いのが北海道(47.6%)、中部管区(45.8%)、関東管区(41.2%)、警視庁(40.0%)の順であった。「不安を感じる」人の割合が最も低いのは四国管区(21.7%)で、次いで東北管区(28.7%)が低い。反対に、「不安を感じない」と回答した割合が高いのは四国管区(43.3%)で、次いで九州管区(36.8%)であった。また、「出歩かないから分からない」と回答した人の割合が最も低いのは近畿管区(19.3%)、次いで警視庁と関東

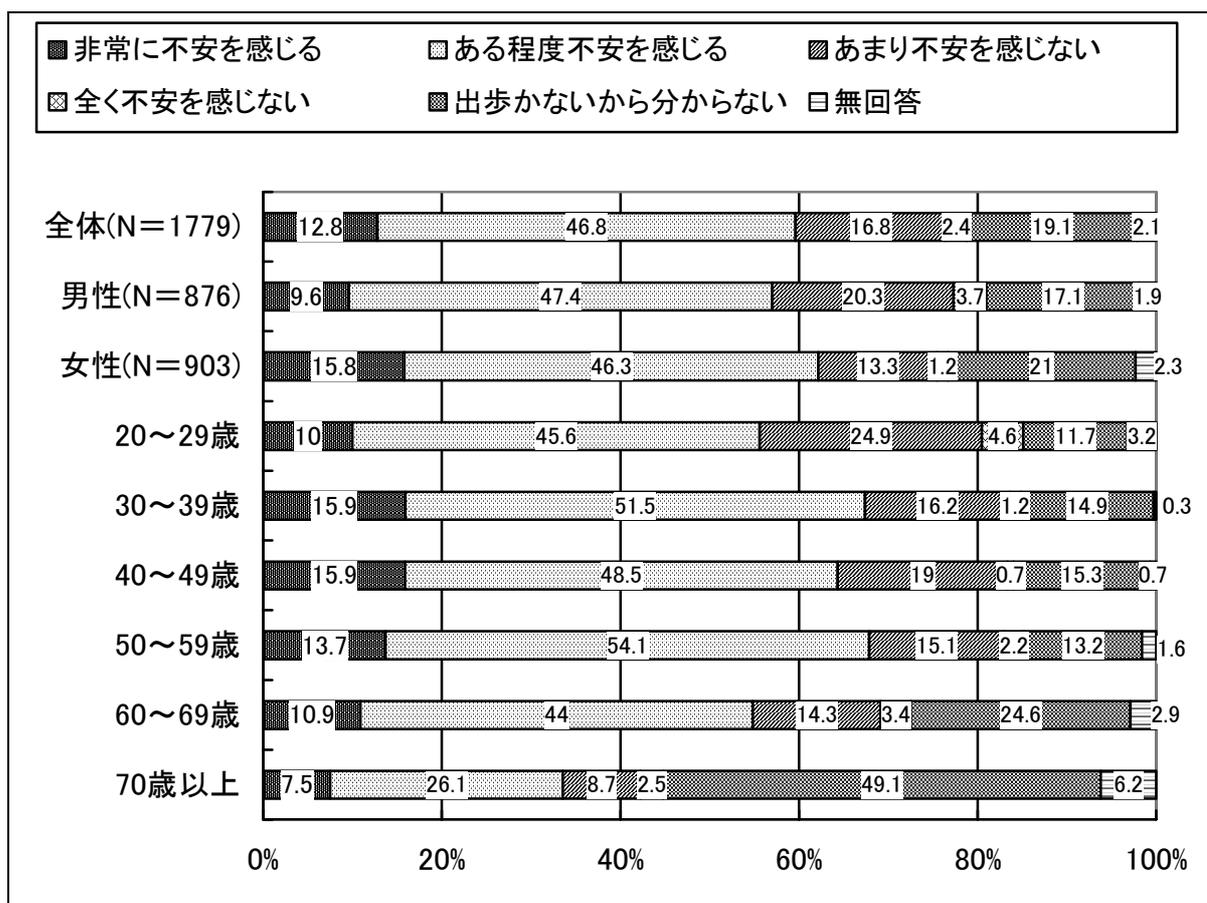
管区（各 27.5%）が低く、最も高いのは中国管区（39.8%）で、次いで四国管区（35.0%）が高い。

以上の結果は、居住地域内を夜間に一人歩きすることが多ければ不安を感じる人の割合が高くなり、夜間に散歩しなければそれだけ不安も少ないということを示すものであろう。したがって、夜間に居住地域内を一人歩きしない人の割合が、前回の調査時より大きく増加したことが、今回の調査で「不安を感じる」および「不安を感じない」と回答した人の割合が減少した要因の一つと考えられる。

7. 夜間、家族の地域内一人歩きに対する不安感

問9「あなたは、同居の家族が夜11時を過ぎてから、住んでいる地域を1人で歩いているとき、犯罪にあう不安をどの程度感じていますか」と尋ね、前問と同様の5つの選択肢を提示した。結果は、図Ⅱ-2-10に示した。

図Ⅱ-2-10 夜間、家族の一人歩きに対する不安感(男女別、年齢別)



図に見るように、全体では、「不安を感じる」と回答した人（「非常に不安を感じる」＋

「ある程度不安を感じる」が 59.6%、「不安を感じない」と回答した人（「あまり不安を感じない」＋「全く不安を感じない」）が 19.2%であり、不安を持つ人の割合がかなり多い。また、男女別に見ると、男性では「不安を感じる」が 57.0%、逆に「不安を感じない」が 24.0%であるのに対し、女性は「不安を感じる」が 62.1%、「不安を感じない」が 14.5%である。男女とも過半数が、家族の居住地域内における夜間の一人歩きに安心していない状況にある。

前問の自分自身が犯罪にあう不安と比較すると、家族に対する不安感の方が圧倒的に高い。特に、男性にその差が顕著である。

年齢別では、30歳代から50歳代までは「不安を感じる」が同程度で最も高く（67.8～64.4%）、次いで20歳代（55.6%）と60歳代（54.9%）が同程度、70歳以上が最も低い（33.6%）。逆に「不安を感じない」は、20歳代で最も高く（29.5%）、次いで30歳代から60歳代までが同程度（19.7%～17.3%）、70歳以上が最も低い（11.2%）。70歳以上では、「出歩かないから分からない」という回答者が約半数（49.1%）を占めており、この年齢層に「不安を感じる」と「不安を感じない」の割合が低いのは、そもそも夜間に出歩く同居家族がいないことによると思われる。

都市規模別では、「不安を感じる」が、大都市 64.1%、人口 10 万以上の市 60.9%、人口 10 万未満の市 57.4%、町村 50.5%であり、都市規模が大きいほど家族の夜間一人歩きに不安を持つ人が多い傾向がみられる。これに対して、「不安を感じない」と回答した人は、大都市の中でも東京都区部で最も多く（26.4%）、次いで町村に多い（24.3%）。また、「出歩かないから分からない」と回答した人は、大都市ほどその割合が少ない。

警察管区別では、「不安を感じる」と回答した人の割合は近畿管区が最も高く（68.8%）、次いで高いのが中部管区（63.6%）、警視庁（60.4%）、関東管区（60.7%）の順であった。「不安を感じる」人の割合が最も低いのは四国管区（45.0%）で、九州管区、中国管区、東北管区、北海道はいずれも 50%台であった。反対に、「不安を感じない」と回答した割合が高いのは四国管区（25.0%）で、次いで警視庁（23.2%）、九州管区（22.5%）、東北管区（21.3%）の順であった。また、「出歩かないから分からない」と回答した人の割合が最も高いのは中国管区（25.9%）、次いで四国管区（25.0%）、九州管区（24.5%）、東北管区（24.2%）の順に高く、最も低いのは近畿管区（13.3%）、次いで警視庁（13.8%）、関東管区（17.4%）が続く。

8. まとめ

日頃、犯罪被害にあう不安を感じていると回答した人は、男性 39.2%、女性 50.5%、全体では 44.9%になる。男性よりも女性のほうが、犯罪被害と無縁ではないと感じている比率が高い。同居している家族が犯罪の被害にあう不安がある人は、男性 57.0%、女性 60.4%、

全体では 58.7%になる。自分自身が犯罪の被害にあう不安よりも、家族が被害にあうのではないかという不安感の方が高い。

21 種の犯罪種別について、それらの犯罪の被害にあう不安の程度を尋ねたところ、悪質・危険な交通法令違反、どろぼう、自宅や敷地への無断侵入、暴行・傷害、ひったくりの被害の順で高かった。

また、実際に前記の各罪種の被害にあう可能性の認識（リスク知覚）を尋ねた。リスク知覚が高かった罪種は、悪質・危険な交通法令違反、どろぼう、自転車盗、自宅や敷地への無断侵入、ひったくり、子どもへの声かけ・追いかかけ、器物損壊の被害の順であった。この順位は、犯罪不安感の高い罪種と若干異なる。

犯罪被害への不安感が高い場所としては、路上、繁華街、公園、電車やバス、駅や空港、の順で高かった。男性よりも女性のほうが、どの場所に対しても不安感が高いが、特に、エレベーターと駅や空港での不安感が高い。総じて、不特定多数の人が集まる場所に対する不安感が高い傾向がある。

居住地域内を夜間に一人歩きすることに不安を感じている人は、男性では 31.9%、女性では 49.9%であり、女性の半数は居住地域内においても夜間の一人歩きに安心していない状況にある。家族が居住地域内を夜間一人で歩くことに不安を感じている人は、男性 57.0%、女性 62.1%で、全体では 59.6%である。男女とも過半数が、夜間に家族が居住地域内を一人歩きすることに不安を感じている。